

# 水が語る京の暮らし ～伝説・名水・食の文化～

著者 鈴木康久 出版社 白川書院

京都は「水の都」である。だから京の暮らしは、水で語ることができる。そのような話から始めても、水の都として知られている大阪やベニスのイメージには遠く、なかなか意図は伝わらない。

しかし、平安遷都の詔にある一説「此国は山河襟帯にして自然城をなす。この形勝により新しき号を制すべし。宜しく山背国を改めて山城国となすべし」(『日本紀略』)から入ると、少し目が輝きはじめる。都の東には風水で「青龍」と位置付けられた鴨川が位置し、南は「朱雀」である巨椋池(宇治川)、西には桂川が流れる。更に京都盆地の地下には琵琶湖に匹敵する211億トンもの水が貯えられているという。この豊富な水が千年の都の繁栄を支え、様々な文化を育んできた。都の特性を水と暮らしの関わりから論じたのが本書である。

都の中心を流れる鴨川は、京都人に最も愛されている河川であろう。千年の歴史を辿ると納涼床に代表される遊覧の川とは違う一面が見えてくる。平安中期の随筆家である清少納言が『枕草子』で選んだ飛鳥川、大井河、おとなし川などの12の河川の中に鴨川の文字は見あたらない。国史に鴨川を探すと『日本紀略』の弘仁5(814)年の条にある「禊於鴨川」が初見となる。歴代の天皇が葛野川(桂川)には行幸しているが、鴨川行幸の記述はない。仁明天皇が天長10(833)年に河原で即位の禊ぎを行ってから歴代天皇が二条以北側の鴨川で禊ぎを行ったと伝わっているように、平安貴族にとって鴨川は「禊ぎの川」であった。

京都の西を流れる桂川では、「舟運の川」としての役割に着目してみた。京都の港と言えば、三十石舟で知られる伏見港であるが、荷舟は桂川を上り草津湊を使っていた。多くの物資を一度に運搬できる百石舟が、就航できる水深が求められたのであろう。河川に併せて、100ヶ所以上もの名水(地下水)を紹介しているのも本書の特徴となっている。祇園祭や龍神、弘法大師などのテーマに応じた名水を訪ね歩き、地元の方の話を聞き、『都名所図会』などの江戸時代の地誌の内容を踏まえて紹介している。

本書は次の5章から構成し、「京都の水文化」についてこれまでに語られることがなかった視点で分かりやすく説明するよう心がけた。

- 第1章 京の人びとと水(井戸が支えた都、京都人の好む水、他)
- 第2章 京の名水めぐり(名水が選ばれたわけ、『都名所図会』に見る井筒、他)
- 第3章 京の川をたどる(鴨川、高瀬川、保津川、桂川、琵琶湖疏水、他)

第4章 京の水と食文化(豆腐食べくらべ大実験、和菓子を彩る水の意匠、他)

第5章 京の水 三つの特性(水之神と京都、平安京の水路計画、豊富な地下水と京文化)

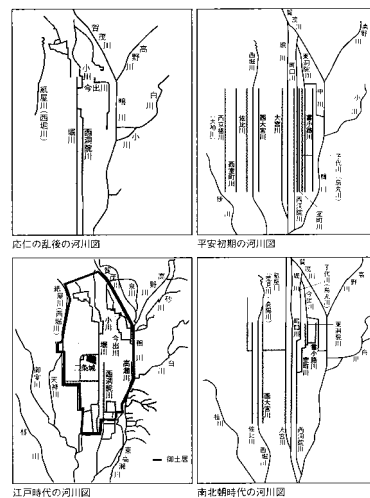
資料解説 文献から見た「京の名水」(江戸時代に刊行された京都に関する主な地誌・名所案内等に記載されている名水)

執筆する中で見えてきた事は、暮らしの中で育まれた水文化はしっかりと次世代へと伝わり、そのひとつひとつに大切なメッセージが秘められていることである。本書を手にとっていただいた方に、都人がそれぞれの時代の中で水をどのように捉えられてきたかを感じていただくことができれば、これに勝る幸せはない。

なお、本書の売上の一部は「母なる川・保津川基金」に寄付され、保津川流域を守り育てる活動に使われることになっている。

※ 本書に関する問合せは、白川書院(075-781-3980)まで

鈴木康久(カッパ研究会世話人)



平安初期の河川図、南北朝時代の河川図  
平安京造営に際して、10本以上もの河川(水路)が整備された。



装幀の絵は『和漢三才図会』を用いている。  
(※ 日本図書館協会選定図書)